

つ
な
が
り

ま
ち
と

Sun¹⁶

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2018



SS 第六号 二〇一八年十二月十日発行 企画発行 いばらきまちとサポーターズクラブ事務局 ibs3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7126



Sun¹⁶

茨城県
東茨城郡
茨城町

Autumn / Winter 2018

Contents 目次

- 03 特集 | 創る継ぐ
- 04 淵沼竿を今に繋ぐ
- 07 古家具の息吹を感じて
- 09 まちで暮らす人
まちを想う人
- 15 まちの人が集う食堂
あったかくて変わらない味
- 17 連載 マチのケシキ
- 18 編集室から



Cover
写真／アラタケンジ モデル／松浦陽菜
“誰かを想い、手紙をしたためる”
町内で唯一の丸型ポストから投函される葉書。
いば3サポーター1名へ、この葉書が実際に届きます。
肌寒い日々を温かい気持ちにさせてくれるかもしれません。



秋深まる 螢虫咸俯す時節
ちゅうちゅうみなふ

銀杏 黄金色に輝き やがてその葉を地に落とす

露時雨つゆしぐれが野山に降りる頃

冬の足音が側に聞こえ始める

夕暮れ時 山を越え遙か遠くから渡り来る鳥達

光や空は刻一刻とその色を変え

里山や刈田 人々の息吹を

黄金色に照らし出す

その輝きは

命の営みを優しく包んでいく様

Sunは

茨城町とゆるやかにつながる

いくつもの縁を

人々の暮らしや情景と共に

綴り 伝えていきます

継

創

特集

古くから続く技
継がれていく中 新たな技が創られ 加わり
後世へと引き継がれていく

技から生まれたもの 創り手の元を離れ
出合いや別れ 込められた想い 時を刻み
一度は役を終えたものが 再び歩みを始める

この町で続いてきた技 受け継がれるものを伝えていきます

写真「アラタケンジ 文」米村優子 石川聖太

創る

瀬沼竿を今に繋ぐ 竿師 吉田孝治

海水と淡水が混ざり潮汐の影響を受ける瀬沼は、ハゼ、フナ、ウナギ、ボラをはじめ数十種類の魚が生息する釣りの名所。釣り竿一本で大小さまざまな魚を釣り上げられるよう独自の丈夫な和竿が作られたのが瀬沼竿の起り。江戸時代頃に瀬沼一帯に伝わってきたとされる瀬沼竿。素材である竹を活かした細い帆先が、魚が餌を食べる際に円を描くように撓る。一度は途絶えたその技を受け継ぎ、今に伝えるのが茨城町長岡に工房を構える吉田さんです。

く

る

吉田さんの工房には、自身が制作した瀬沼竿をはじめさまざまな和竿が所狭しと並び



スポーツフィッシングでも使えるようにリールとリールシートが付いた涸沼竿
シャフトに涸沼竿を使ったゴルフクラブも試作

そこは今も昔も決して変わらない。いつまでも長く使えるものを作りたい。
吉田さんは、新しい技術を柔軟に取り入れていくことで、自分にしかできない
涸沼竿を生み出し、かつて自分が東明さんから教えを受けたように、講座や
教室など、これまで培ってきた技を教える機会を作り広めたいと考えている。
涸沼竿を実際に見て、手に取って、体験してみてほしい。そこから涸沼竿の
魅力、奥深さに気づき、さらにそれを作り上げるための技が次の世代へ
新しい姿で受け継がれていくことを吉田さんは願っている。

一般的に江戸和竿の材料は種類を問わずさまざまな竹が使われる。吉田
さんも同様。竹の種類にはこだわらず制作するが、涸沼竿は程よい撓りが特
徴なので、太さはなるべく細い方がよい。だがそう簡単には理想の竹には出
会えないので、多少太くとも竹本来の姿をそのまま活かして作り上げる。その
ため同じものは一つとしてできない。一本一本それぞれの表情が違うのも
魅力。竿作りに使う道具も、試行錯誤を繰り返しながら、自らの手になじみ、
使いやすいものを一から手作りしている。
竹から涸沼竿になるまでの工程は、初めに野山から竹を採ってきて、天日
干しで二〜三カ月、その後日陰干しでさらに二〜三年、そこから竿作りに入り、
制作期間は三カ月程度。トータルで四年近くかかる。一年間で十〜十五本
ほど制作する。



竹の根をすべて切り落とすと、丸い形が出てくる
頭の中に絵柄を思い浮かべながら、一定の間隔で細い糸を巻き
糸の上に漆を塗って固め、竿の柄を作っていく

吉田さんと涸沼竿の出会いは今から十三年前。前職の航空自衛隊を
退職後、息子さんが見つけてきたZEPの教養講座で和竿作りを体験した
ことがきっかけ。元々手先が器用で簡単な機械の整備は自分でこなす他、
趣味で海や川に出かけ魚釣りをしていたので「こんな面白いものがあるのか」と、
どんどん夢中になった。
この講座で講師をしていたのが江戸和竿を学び、涸沼竿を現代に甦らせ
た川上東明氏。講座内で櫛竿、真鯛竿を作り終え、もつと本格的な竿を
作りたいと東明さんの工房へ出向き、自身の竿に対する想いを伝えたところ、
「それじゃ、涸沼竿を作ってみるか」と、声をかけてもらった。
実際に東明さんの手ほどきを受け、竿作りを始めてみると、帆先が左右
に偏ってしまうわ、竹に糸が重ならず綺麗に巻けないわと試行錯誤の日々。
その中で自分なりの方法を見つけ、少しずつ形にしていって。現在のような
涸沼竿の形になるまで、実に六〜七年かかった。その間、東明さんから受けた
「竿師は二足の草鞋を履いて暮らさないと駄目だ」という教えを守り、日中に
別な仕事をしながら、自宅に戻ると涸沼竿を作る生活を送っていたが、
現在は涸沼竿作りに専念するようになった。

自らの手で竿を作るうちに、だんだんと竹そのものの奥深さにも気づいた。
竿を作り始める前は、竹の種類は篠竹や真竹くらいしか知らなかったが竿
作りを進めるうちに、布袋竹、矢竹、高野竹などの種類があることがわかり、
その中でも師事した東明さんが以前、偶然見つけた「天狗竹」という節が極
端に太い丸節と呼ばれる竹に近いものを求め、各所を探し回った。人が入ら
ないひっそりとしたところにある、背の高くない竹が良く、仲間から口コミで
聞いた場所がたとえ遠くても、必ず行くようにしている。そのため、川の近く
に生えている竹は、一般的には強度が良くないと言われていても、吉田さん
はその中から使えそうな丸節の竹を選んで使う。

吉田さんの涸沼竿を初めに手にしたのは釣り好きの女性。吉田さんが作る
竿の美しさに惚れ込み竿を買ってくれた。それから口コミで少しずつ評判が
広がり、研究のため涸沼に通っていた大学教授や、海外から来たお客様への
土産品として使いたいなど、全国からの問い合わせが増えたそう。

「涸沼竿は美術品ではないのでどんどん使って欲しい。修理もできるし
丈夫です」と吉田さんは語る。自身も釣り好きなので作った涸沼竿で試し
釣りをすることで、撓り具合や作品の出来栄えを確認している。

涸沼竿の伝統を受け継ぎながら、新しい技法も積極的に取り入れている吉
田さん。竿の装飾に青森の津軽塗の髪漆という技法を用い、漆を数十回塗り
重ね、それを研磨することで独特の斑点模様を浮かび上がらせる。また、これ
まで涸沼竿の色味は伝統を忠実に守った黒、茶、透色などを用いたものが多
かったが、竿の色が他にもあってもいいのではと思い、赤、青、緑を用いた竿を
作ったり、三本つなぎの涸沼竿を試作したりと革新的な竿作りを進めている。
その他にも、時間があれば骨董市を回り、そこで見つけた古い和竿を
自らの手で直して研究し、時には技や造りを涸沼竿に応用することも。
ここまで釣り竿にのめり込んだのは、幼い頃自宅の裏を流れていた川で
同級生たちと釣りをしていた思い出が原体験としてあるからだそう。

継ぐ

古家具の息吹を感じて

家具職人 小橋博之

かつて家具職人や木工職人により、使う人たちのことを考え、「一つ一つ手で作られた家具や什器。長い年月が経ちその役目を終え、ひっそりと眠っていたものを職人の技で再び目覚めさせ、使い込んだ味わいと共に新しい価値を生み出すのが、茨城町大戸に古家具店を構える小橋さん。

古家具と呼ばれる家具は、その時代の職人たちがきちんとしたものをも未長く使えるように、と考えて作っている。丁寧な手仕事はもうろんのこと、使われている木材が今の時代になると高価なものとして扱われることも少なくない。そしてそこには、たとえ百年を経ても色褪せない普遍的な質と使い込まれた温かさがある。それらと対話をしながら丁寧に引き出していくのが小橋さんが持つ技。

かねてより興味があった家具職人を目指し、木工所に転職。日々公共施設や店舗の什器を制作しながら木の加工技術を習得後、独立し家具職人の道を歩み始めた。使う人のことを考え、一つ一つ手作業で家具を形にしていくな中、たまたま自宅の納屋にあった古い木箱に脚を付けてみたところ、そこに新しい魅力を感じ、家具制作と並行して古家具も扱い始めるようになった。

古いものに興味を持つきっかけになったのが、高校時代に訪れた古着ブーム。デームを中心としたアメリカのワークウェアなど、古いものを意識したのはこの頃。今では使われない生地やデニール、それが実際に使われていた時代背景など現在には無いものに価値があるということを初めて知り、そこから旧車と呼ばれる昔の車や古い建造物、そして古家具へと関心が移っていった。

一つの古い棚があった場合、それが廃品となるか、古家具としての魅力を引き出せるかは、一見して判断しにくいもの。これまでに見たさまざまな年代の家具や古道具などから得た審美眼と確かな技で、家具たちが歩んだ歴史である傷や汚れを魅力として活かし、実用的に問題のあるところはきちんと修繕することで、手に取る人たちの心惹かれるものに仕上げる。日常使用に支障をきたす部分を修繕した後、ホイールサンダーと呼ばれる木材や金属を研削する電動工具で木目を強調する。浮造仕上げを施し、塗装やオイル加工などのさまざまな仕上げ方により、もとの風合いに忠実な使用感を出したり、時には大胆に塗装することで新しい風合いを引き出す。その一連の技で小橋さんが得意とするのが、独学で覚えた加工技術。

「エイジング」と呼ばれる加工は、職人一人一人の個性とバランス感覚が問われる技術。手をかけないと程よい風合いは出てこない。手をかけすぎてしまうと廃品に見えてしまう。素材ごとの経年劣化を熟知しているからこそ、確かな判断が生まれる。「基準とか言葉にするのは難しい。昔から程よくたびれ感のある古着とかが好きでしたから、そういう感覚的なものが染み付いているんでしょう。エイジングを行う際は、まるで何十年も使っていたかのような味わいを出したい、というのは常にあります」。

空き家、蔵、市場などで買い付けた古家具は、あえて自らの心は入れずに、職人の手仕事を一つ一つ観察するように修繕する。修繕するために家具を分解していくと、時折作った年月と職人の名前が裏側の見えないところに書いてあったりする。

「昔の建物の屋根裏や床下にも、手がけた大工の名前が入っていたりするのですが、それを見ると職人としての役目を果たしていたのだな、と感じます。先人たちの家具に対する想いを尊重し適切な修繕を行い、後世に引き継いでいく。家具職人としての日々を、そう歩んでいきたいと考えています」。



明治時代に建築された醤油蔵を改装した店舗には、手仕事により蘇った古家具たちが凛とした佇まいで列ぶ

Feeling & Thinking

まちで暮らす人 まちを想う人

写真 竹内 慎 文 一ホシカワリミコ 矢薙 静

彫刻と人との関わり

まちで暮らす人

彫刻家 浅野暢晴

*Relationship
with sculpture*

浅野暢晴さんは一九七九年石岡市生まれ。二〇一五年より茨城町に在住。

石岡市内の小・中学校を経てつくば市の高校に入学し、卒業後は茨城大学教育学部の美術コースに進学。在学中に絵画から彫刻へと専攻を変え筑波大学大学院へと進んだ後、第九回日本現代陶彫展にて銀賞を受賞。近年では石岡市の常陸国総社宮での展示や中之条ビエンナーレに参加、茨城町立奥谷公園に作品を寄贈するなど、彫刻家として精力的に活動しています。

描くのが好きだった子供時代

小さい頃は今でいう文化系。まわりに漫画を描いたりする友達が多くて、自分もよく描いていました。小・中学校は地元の学校に通っていたのですが、当時石岡の街は結構荒れていて、だんだん地元に興味がなくなっていたので、高校は学区外のつくば市の高校に通いました。将来は漫画家になりたい、など思っていたのですが、そのうち漫画が上手な友達が出てきて、これはだめだと早々に諦めてしまい（笑）。美術が好きだったので、一枚絵を描く方が得意だったイラストレーターもいいな、と漠然と思っていました。その後、本格的に進路を考えた際、親から美術で食っていくことの難しさなどのアドバイスもあり、美術教師を目指し茨城大学教育学部の美術コースに入りました。

ルーツを感じた〃土偶〃、彫刻との出会い

大学二年生の時に専攻を絵画から彫刻へ変えるきっかけがありました。それまで彫刻はロダンなど外国の作品であり、どこか遠い存在だったのですが、ある日、国立博物館で土偶を見る機会があつて、見た瞬間になにかこう、血の流れみたいなものを感じ、ピン！ときて。それからは彫刻の世界へ入りました。大学では二年しか彫刻を学べなかつたので、もつと本格的に彫刻を学ぶべく筑波大学大学院に進学しました。

作品を制作するにつれ、作品がだんだんと抽象的な形になっていきました。

その頃は抽象をやりきってしまったのでは、と思い始めていて。ふとこれいいのか、自分の作品の意図が伝わりにくいのではないか、という疑問も生まれ始めていました。

その後、大学時代からの恩師との決別がありました。展覧会を一緒に開こうとした際に、考え方の相違から大喧嘩をしてしまったんです。それまでは先生が見たらどう思うか…というように、作品の出来は先生の批評の影響下にありました。結果、先生から離れることになるのですが、先生の批評が自分の作品の評価になっていたので、初めはすごく恐怖心がありました。しかし、自分はもうちょっと違うものが作りたい、と思っていたところもあつたので、良し悪しもわからずとにかくたくさん作品を作りました。思い返すと、模索しながら形にする行為の中に今につながる要素がいくつもあり、その経験で得たものはすごく財産になっていると感じます。自分の作品の方向性に素直になれなかつたら、自分ならではのものは生み出せなかつたと思います。

トリックスターと自分自身を重ねて

作品では、妖怪みたいな人間以外の異形の存在を表現したいんです。アボリジニの神話（*）が好きなんですが、神話には道化（トリックスター）という存在が不可欠なんです。彼らは脇役ではありますが、彼らがいないと物語は展開しません。自分をそこに重ねるという意味で、三本足のトリックスターという彫刻を作り始めるようになりました。

昨年、ネットで作品が突然話題になりました。展示だと知らずに神社に來た人が〃神社に変なものがある〃とSNSに書き込んだのがきっかけで広がっていった。それがすごくおもしろいと感じて。これまで作品はただ作る、表現するというのが目的だったけど、そこに人が関わることで、コミュニケーションが生まれ広がる。この経験を通して価値観が一気に変わりました。そこで、

* アボリジニの神話：オーストラリア先住民アボリジニの間に伝わる神話

トリックスターを個人に送り、旅をさせるようなプロジェクトも始めました。実際に手にして触れてもらう、自分の好きなところに連れて行き鑑賞してもらう…きつと土偶も儀式的な意味合いだけでなく、そんな側面も持っていたと思うんです。芸術は理解しなくてはいけない、ということではなく、身近なものであるというように思っています。これからは作品を作りながら、作品を通じて人と関わっていききたいです。

人、自然、彫刻の偶発的な出会い

数年前に、神社の境内での展示を初めて行いました。場所は関東三大祭の一つ、石岡のおまつりの中心となる石岡市の常陸国総社宮。きっかけは総社宮の禰宜ねいが同級生で「神社で展示やつてくれない？」と声をかけられて。ギャラリー以外の場所でやりたいと思っていたので二つ返事でＯＫしました。総社宮が荒らされると思う人もいるかな、と内心構えていましたが、事前にレクチャーを受け、守るべきことを守り展示を行ったところ、反響がすごくよく、みんな楽しんでくれて。一年目は個展から始まり、今ではたくさんの作家に声をかけグループ展を行うようになりました。子供の頃に地元が苦手になつて以来、なるべく距離を置いていたのですが、今、その中心地に戻って活動しているという…(笑)。きつと自分の心としつかり向き合わなければいけなかったのかもしれない。

屋外で展示をすると、通りがかりの人が作品を見てくれます。芸術にあまり関心がなかったり、なんだかよくわからないと思っている人に、単純におもしろいんだよと知るきっかけとして、少し暴力的ではありますが、偶発的に作品に触れてもらう。まずはおもしろいものがあるなど感じ、興味を持った人たちがギャラリーや美術館に来てくれる、そういう流れができていくといいなと思います。

作品に人や自然が関わりを持ち、変化し膨らみが増す。それは自分にとってすごく魅力的なことだと思います。

茨城町に根を下ろし始めて

三年前から茨城町に住んでいます。今まで家族は彫刻と関わりの薄い生活でしたが、アトリエを自宅の敷地に作ったので、自然と生活の中に作品が入り込んでくるようになりました。子供たちにとってはすごくいいのかなと思っています。以前は、長男が展覧会に来て怖いって泣いちゃったんです。すごいショックでした(笑)。次男は普段から見えていたからか全く恐怖心などないようです。やっぱり家族と過ごしながらか作るという環境はいいですね。また、町内の奥谷公園に作品を設置させてもらったというのが自分としてはすごく嬉しくて。地域とダイレクトにつながりができたというか。

以前はアパート住まいだったこともあり、そこにいることの意味を感じませんでした。家を建てて住むということは、少なくともしばらくはここにいてことになるし、子供たちもこの場所で育っていくということもあり、住むということを通じて、自分がこの場所に根を下ろし始めているんだという感覚がありますね。●



子供たちに伝えたいこと

まちを想う人

会社員 幡野智子

Things to tell

幡野智子さんは一九七九年茨城町下飯沼生まれ。高校時代にアトラクタオリンピックユースキャンプ日本代表団員に選ばれる。大学進学のため上京。北京への留学を経て放送業界に就職し、二十五歳で結婚、出産を機に退社。三人の子供たちに恵まれ、現在は東京都千代田区在住。子育ても一段落した二〇一八年九月に再就職しました。

興味にすぐに手を伸ばす

父は専業農家、母は幼稚園の教諭をしていて一人ともあまり家に居なかったので、小さい頃は祖父母にかわいがられていました。学校が終わると急いで家に帰り、自転車に乗り数キロ先にある友達の家まで遊びに行ったりする元気ハツラツな男の子のような性格で。女友達が外でゴム跳びをしていると、それに混ざるのが気恥ずかしくて、教室で本を読んでいた。ひたすら本を読むのも好きで、図書室の九割くらいの本は読んだと思います。また、ピアノをはじめプールや弓道・空手などたくさんさんの習い事にも通っていました。中学校では部活動に夢中。吹奏楽部でトランペットを始め、三年の時に部長になり県のコンクールで銀賞を取りました。

高校二年の時、父親からオリンピックユースキャンプ（*団員派遣募集の話聞き、応募するとなんと団員に選ばれ、日本代表としてアトラクタへ行くことになったんです。現地で世界中から集まった団員たちと交流を図る際、英語が全く話せなくて。その後仲良くなった団員と文通が始まり、返事を書くために英語を本格的に学び始めました。三年の時にも、シンガポールでのRC（青少年赤十字）部アジアキャンプに参加。同じ参加者であるアジアの人たちと交流するうちに、中国語も話せたら楽しいのでは、と思うようになりました。

進学した大学では中国語を専攻しました。年の離れた兄妹たちはまだ小さかったし、親に負担をかけたくない、朝夕の新聞配達の後、バイトをかけもちしながら大学に通う日々。かなり忙しかつたのですが、大学三年が終わるタイミングで一年休学し、北京へ留学しました。留学先では中国語を学びながらの寮生活。

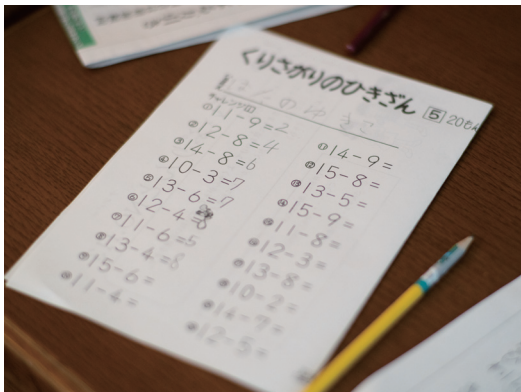
だったので、ママ同士の距離感は自然と近くなり、みんなで公園や動物園に行ったりとつながりができました。子供との生活にも少し慣れ始めた頃に次男が生まれ、また急に忙しくなりました。私の弟は五歳、妹は十一歳下なので、年の近い兄妹に憧れていたのですが、実際には長男もまだ二歳で着替えや食事も一人でできない、次男も見なさいけないしで、日々わちゃわちゃでした（笑）。その後、長女が生まれると、上二人がある程度手がかからなくなっていたので、そっくろ泣いたっていいんだよとか、時には喧嘩も大事！と言える余裕が出てきて、少し肩の力が抜けるようになりました。

三人の子育てをしてみて、こんなに思い通りにいかないものかと思う反面、面白いものだなあ、と感じています。いろいろ習い事もさせましたが、興味がそれぞれ違うので続いたり続かなかつたりもしましたが、いい子でいることが全てでは無いので、子供たちの興味やそれぞれの個性を受け入れ、許容してあげるのが一番なのかなと気づきました。以前どこかで聞いた、産まれたばかりには「手」をかけてあげて、自分でできることが増えてきたら手はからなくなる分「目」をかけてあげて、思春期になったら言葉では言わないけど「心」をかける、という姿勢が本当に大切なんだな、と思います。

同時に、私も子供たちに育てられたなという感じもすごくあります。元々私は注意したり、人に意見を言えない方でしたが、子育てをしている中で、こはしかり言わない！と思うところがあったり、日々決断の連続。当然自分のことだけでは無くなるので、強くなった。育児という漢字は「育自」と書くと言いますし、人間力も磨かれた。そうか、かあちゃんになるってこういうことだったのか!!と思います（笑）。

制約と充実、不便と利便

都会で子育てをするのはいろいろと苦労があります。子供をのびのび遊ばせる場所が少ない。ビルの谷間にある小さな公園はボール遊びは禁止、電車に乗りうにもベビーカーだと階段が多くて乗り降りが大変、車内での問題もある。



文化の差や言葉に戸惑いながらも、同級生たちと電車を乗り継ぎ旅をしたり、日本人会の方々と知り合い、たくさんのことを学び、刺激を受けた一年間でした。その後日本へ戻り、就職を考えた時、留学で同期と学年が一年ずれたせいで、就職試験や面接のレクチャーを受けないまま就職活動をしていて。中国語を使う職種を見つけられず、希望する会社から内定ももらえず焦り始めた頃、留学先で知り合った日本人会の方の縁で、大手放送局の関連会社へ入社することになりました。そんな中、主人と出合い結婚、程なく長男が生まれました。これまでに興味があるものにはすぐに手を伸ばしてきましたが、生まれてきた子供としつかり向き合いたいと思い、会社を退職し家庭に入りました。

手をかけ、目をかけ、心をかけて

出産当時の年齢は二十代半ば。留学や仕事、自分のやりたいことに忠実に生きてきたこれまでとは全く別の世界。日々迷いながらも手探りで子育てをしていました。近所に児童館があったのは本当にありがたかった。他の子供たちと一緒に遊ばせたりするのはもちろん、児童館で知り合ったママたちがみんな、人目の子供

マンションの騒音問題などもあり、常に制約と隣り合わせで窮屈だな、と思うことも少なくはありません。都会というのは、良くも悪くも目が届いてしまう環境。子供から目を離すなんてあり得ない、みたいな風潮があるんです。

もちろん悪いことだけではありません。児童館の設備は充実していますし、子供たちを対象にしたイベントも多いです。近所に出版関係の会社が多い場所だけに、子供を対象にした本のイベントがあったり、夏祭りも近隣の企業が参加するため規模が大きい。もちろん学習塾や習い事ができる場所もたくさんありますし、学校の授業でも生け花や書道の先生が教えに来るなど、いろいろなものに触れる機会は多く、本格的で質も高いと感じます。

帰れる場所があること

私は経験を通じて新しいことをたくさん知りたいと思う性格なので、子供たちが興味があることに積極的にチャレンジでき、多感な時期に社会を知る余裕を持てるよう、いろいろな準備しておくのが親の務めと思っています。なので子育てをしていても、また働きたいという気持ちはずっと心の何処かにありました。忙しいのが嫌ではないので、長女が幼稚園に入るタイミングでパートを始め、最近再就職をしました。働きに出ることで子供たちとの時間は減ってしまうので、時に寂しそうな顔も見えますが、かあちゃんがんばれ!!と応援してくれるのは心強いです。

上京してから茨城町には二カ月に一回は帰っています。車で一時間ちょっとですし、そこまで距離は感じないです。今は都会に住んでいますが、心は常に茨城にあります（笑）。茨城町に帰った時にいいなと思うのは、空が広いし自然がたくさんあるのはもちろんですが、人が温かくて穏やかなこと。スーパーで買い物をしていても、子供たちに優しく声をかけてくれたり。子供たちも実家の庭を駆け回ったり、外で遊んでいても誰にも怒られないので、普段よりイキイキしているのがわかります。子供たちには、都会の良さと田舎の良さを両方伝えていきたいと思っています。●

*オリンピックユースキャンプ：青少年を対象にオリンピックへの理解と諸外国からの参加者との交流を目的に行われている事業

あつたかくてボリューム満点の料理で愛され続けて四十年。大衆食堂の柴龍は茨城町役場の目と鼻の先にあります。山盛りのピーマン炒め、ふくらと大きな餃子、あつあつの広東麺、色鮮やかなチャーハン。そして店内に貼られた豊富なメニュー。開店当時からメニューや内装などにも変わっていないお店です。

始まりは昭和五十三年

柴龍は現在のご主人と大正生まれのお母さんが一緒に始めたお店です。早くにお父さんを亡くし、ご主人は小学生の頃から家畜の世話、毎日のお風呂焚きなどを手伝いお母さんを助けてきました。高校卒業後は伊勢甚百貨店へ入社し、食堂の業務を経験。七年間勤めた後、柴龍を開店しました。先に独立した先輩に大衆的なメニューのもつ煮やレーバー炒めを教えてもらいながらのスタート。程なくして結婚。「忙しくて嫁探しもできなくて、お見合いだね。色が黒くて丈夫そうな娘がいる。あれはバテねえ」と言われたんだ(笑)「ご主人は振り返ります。奥さんは日立製作所のキーパンチャーから食堂の若女将に転身。急な環境の変化で戸惑いはなかったのかと尋ねると、実家が涸沼のほとりで貸舟業・民宿業を営んでいて、人の出入りが多い環境で育ったから人と接するのは平気だったと言います。それから、満面の笑みで「私、ラーメンが好きだったの!」と。

こだわりと循環型の暮らし

タレやスープなどは自家製、できないものは使いません。回鍋肉の味噌を何時間もかけて作ったり、焼肉や酢豚、カツ丼のタレなどもすべて手作り。冷やし中華に至ってはご主人の畑のキュウリができるまで提供しないのだそう。夏場のナスは注文が入ったら畑から採ってきて調理することも。すべての野菜を作っているわけではありませんが、畑で採れた野菜や飼っている鶏の卵を用いたり、実家や親戚が作る茨城のお米を中心に使用しています。

それから、後ろの山で百匹ほど飼っている烏骨鶏やチャボ。調理の際に出る野菜クズを餌にし、鶏糞や卵の殻、米のとき汁などを雑木林の葉と発酵させて肥料を作り、畑の野菜を育てたりとものを大切にして無駄にしない循環型の暮らしをしています。

まちが賑わい、活気のあつた時代

バブル期は大忙しの毎日でした。宴会場を作りカラオケを導入したり。宴会で五、六時間も帰らないお客さんがいて、何時だと思つての「帰れ」と言うこともあつたそう(笑)。お昼も出前の注文で電話が鳴り止まないほど。定休日は週一回のみ。すべて片付けてご飯を食べるのは真夜中。今振り返ると若かったからできていたんだよな」とご主人は餃子を包みながら話してくれました。「この餃子だって昔は週に千個作ってたんだよ、今は四時にお店閉めてるんだけど、それでもなかなかできないよ」「てっちゃん、それが年というもんだよ」と奥さん。「お二人は本当に仲がいいんですね」と言うと、「てっちゃんといくちゃんやつてゐるの。うちは子供もいないし二人だから仲良くしなきゃいけないだよ。ケンカしてはやれないでしょ(笑)」と。

二人の絶妙なコンビネーション

現在お店は夫婦二人で切り盛りし、四時までの営業です。ご主人は真面目で黙々と作業をするのが好きなこだわりの人。奥さんは人とワイワイするのが好きな社交的な人。この二人の絶妙なコンビネーションが柴龍の魅力。ふらっと立ち寄って話をしながら、いつもの変わらない味を食べたくなる。そんな場所なのかもしれません。「後継者もいないし、もう年だからいつまでできるか?」なんて言っていました。が、まだまだ頑張ってもらわないと困ります。疲れてちよつと居眠りしているサラリーマン、小さな子供連れの家族、十年以上毎日同じ時間にやって来て同じメニューを頼むお客さん。たくさんの方々が柴龍で過ごす時間を楽しんでいますよ。



まちの人が集う食堂

あつたかくて変わらない味

写真 | アラタケンジ 文 | ホシカワリエコ

連載

マチの ケシキ



第6回 晩秋の月

イラスト | Kenbee67 文 | 石川聖太

地上を見下ろした時
感じる儚さのように
月も見上げる人々を小さくて儂いものだと
感じているのかもかもしれません。



晩秋から冬へ、季節がどんどん流れていきます。太陽が足早に沈み夜が訪れ、日一日と夜が支配する時間が長くなってきました。高い建物が少ない町内では、この時期になると鋭く澄んだ空気の中、まるで自らを主張するように瞬く星たちと、黄から青へ色を変える月を見ることが出来ます。広い田畑、家路を急ぐ車窓、木々の間から覗く月…。月は私たちにいろいろな表情を見せてくれます。いや、見られていると言ったほうが適切かもしれません。

夜も更け、月が一段と輝きを増し、南の空高く昇る頃、家々の灯りもだんだんと少なくなります。まるで眠りにつく人々をしつかりと見守っているかのようです。

涸沼の湖畔に「広浦秋月」と呼ばれる碑があります。かつて水戸藩主徳川斉昭が選定した名勝の一つで広浦の美しい月を觀賞するため涸沼を訪れ、夜の湖面に舟を泛べて観月をした体験から「月色玲瓏広浦秋（月色玲瓏たり広浦の秋）」という漢詩を残しました。湖畔に建つ鳥居の側から見る景色は、高く昇る月と呼応するように光り輝く湖面、空に浮かぶ薄雲と遙か遠くに見える稜線を浮かび上がらせます。斉昭公もこの幻想的な風景に思わず心打たれたのかもかもしれません。

月を見て人々は何かを想い、何かを考え、何かを悟り詩や歌、音楽や絵などさまざまな形に残しています。それは、月が遙か昔から変わらずある普遍的なものであり頭上にあるという条件の安心感から、自らの想いを吐露するように見ているからかもしれません。反対に人々から見られている月は、人々の想いをひしひしと感じつつも、マイペースで飄々とした顔で空に浮かび、疲れないように出たり隠れたりを繰り返しているように思えます。

Sunの表紙がカレンダーになりました！ 抽選で33名様にプレゼント！

ゆうちょ銀行のオリジナルカレンダーである“ゆうちょマチオモイカレンダー2019”で、Sun 第2号の表紙写真が6月のビジュアルに選ばれました！このカレンダーはゆうちょ銀行が、全国のクリエイター約1,650組が参加するプロジェクト「マチオモイ帖」とタイアップして制作。それぞれのクリエイターがまちに対する想いと共にまちを紹介しています。これを記念して、いば3サポーターの中から抽選で33名様にマチオモイカレンダーをプレゼント。①住所 ②氏名 ③電話番号 ④会員番号 ⑤Sunの感想を明記の上、メールにてご応募ください。

申込み先メールアドレス iba3@town.ibaraki.lg.jp 〆切 12/21(金)
当選者の発表は商品の発送を持って代えさせていただきます。
このカレンダーは、関東及び東海エリアの郵便局・ゆうちょ銀行で現在配布中です。数に限りがありますのでお早めに!!!
わたしのマチオモイ帖 machiomoi.net/ 提供：ゆうちょ銀行



From Sun -編集室から-

Sun 第6号をお届けします。

読書、スポーツ、食欲いろいろな秋の過ごし方がありますが、Sunでは「創る」というテーマで特集を制作しました。単純に見るだけのものだけでなく、作品が人と関わっていく様子を取材。取材後、自分の使用しているものってどういう想いが込められているのか考えたくまりました。[ひで③]／手先が不器用でものをよく壊すため、今まで創作活動にあまり縁がありませんでした。そんな自分が「Sun」を通じて皆さまとつながる、創り手の側の気持ちを感じられるのだということを貴重に感じ、改めて少しでも町の良さを伝えていければと思いました。[がっきー3]／最近、都内に暮らす友人たちが「あなたの育った町を見てみたい」と言うので、町内をドライブしました。広がる田園風景と普段見かけない鳥たちがいる光景に「大自然!!」と感動している様子。いつでも見ることができる自然あふれる光景は私にとって友人に自慢できるとっておきです。[243]／いば3の活動開始からもうすぐ2年が経ちますが、あっという間でした。今後、いば3の活動や季刊誌Sunを通して皆さんに「いばらきまち」の良いところを伝えられればと思っています。皆さんが持っている情報も教えてください!メールお待ちしております。[ふぁんとむ3改めふぁんとむ4]／取材や撮影などで町内を歩いていると、不意にいろいろな匂いがあります。都内に住んでいた頃、近所に立派な金木犀の木があり、金木犀の香りを嗅ぐと、その頃を回想してしまう、という秋のおセンチなお話(笑)。さて、ゆうちょ銀行のマチオモイカレンダー発行記念のトークショーに呼ばれて、茨城町といば3のお話をしてきました。緊張することも全くなく(笑) 自分の生まれ育ったまちのことを振り返るいい機会になりました。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2019年3月発行予定です。

Sun 第6号 秋冬号 2018年12月10日発行
企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
〔茨城町 町長公室 秘書広聴課〕
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7126
MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D
取材・出筆 | 米村 優子 ホシカワリエコ 石川 聖太 矢薙 静
写 真 | アラタケンジ 竹内 慎
イラスト | Kenbee67
印刷・製本 | 株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.
Special Thanks [順不同]
松浦陽菜さん 川根郵便局 和竿工房 吉田
BACK YARD 百年百貨店 柴龍
わたしのマチオモイ帖制作委員会 ゆうちょ銀行



“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は、いばらきまちが考えるあたりしくてゆるやかなつながりの場です。まちとのつながりをみんなで共有し、魅力・風景・楽しみ方を見つける活動をしています。ご入会された方には、素敵なサポーターズグッズセットをプレゼント。ぜひご入会ください。

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

